

違いを認め合うために

——依田駿作牧師告別式 式辞——

聖書 コリントの信徒への手紙2 五章1－10節

テモテへの手紙2 四章6－8節

2005年4月16日

渡辺英俊

依田駿作牧師の歩まれた道筋をたどりながら、その面影を偲んでみたいと思います。

依田牧師の経歴については、お手元の式次第の中にご紹介がございますので、そちらをご覧くださいと思います。そこにあります通り、依田牧師は1927年に東京亀戸でお生まれになり、戦争中に、年齢的には高校生ぐらいのご年齢の時でしょうけれども、亀戸教会で鈴木正久牧師から洗礼を受けられました。後に、今の東京神学大学の前身である東京基督教神学専門学校に学ばれ、札幌教会、山口県の光教会、横浜上原教会、そして横浜本郷台伝道所と、牧師を歴任されました。

去る4月13日、午前中の聖書研究を終えて帰宅された直後、心筋梗塞の発作を起こされ、そのまま天に召されました。見事な牧師生涯の終わり方でした。ご家族には申し訳ないのですが、牧師仲間と致しましては「最高だったな」という思いを禁じ得ません。その78年の生涯は、「駿作」というお名前のお通り、駿馬のように走り抜け、あっという間に私たちの視界から消えてしまわれました。

戦責告白を担って

依田牧師をお送りするに当たって、お話ししたいたくさんの方がいらっしゃいますが、限られた時間ですから、ほんの二、三点に絞ってお話をさせていただきたいと思います。

私は、依田牧師のご経歴を改めて見せていただきながら、一つのことに関心を留めました。それは、依田牧師が横浜上原教会に招かれ、赴任された1967年という年であります。この年は、依田牧師と私どもの共通の恩師、鈴木正久牧師が教団の議長になられて、「第2次大戦下における日本基督教団の戦争責任の告白」、いわゆる「戦責告白」が出された年であります。イースターですから、依田牧師が上原に赴任される数日前に、これが出されているのであります。これは単なる偶然ではないと思われます。この時、私はアメリカに留学中で、鈴木牧師が教団の議長になられたことが奇跡であれば、その議長のもとで戦責告白が出されたことも奇跡であり、これでわれわれの教団にも夜明けが来るのだ、という思いを強く抱いたことを、はっきりと記憶しております。

ご存じの方が多いと思いますのであまり繰り返しませんけれども、「戦責告白」というのは

、要するに、日本国家が太平洋戦争でアジア諸国に侵略軍を送った。あれは間違いであった。その間違いに対して、教会は「ノー」が言えなかっただけではなくて積極的に加担してきてしまった。本当にアジアの人々に対して申し訳ない。それだけではなくて、教会がそのことを日本の同胞に対してきちんと「これはいけないのだ」と言えなかった。むしろ、これはいいことだから一緒に協力しようと呼びかけてしまった。その過ちを謝罪する……というものであります。

この告白は、単に過去の過ちを悔い改めるというだけでない、前向きの意味を持っています。つまり、教会は、ただ教会のことを考えていけばいいのだというのではない。キリストは教会の主であられると同時に、世界の主、歴史の主であられる。したがって教会は、自分たちが属している国が何をするか、この社会がどうなっていくかということに対して、神様から責任を委ねられているのだということでもあります。その責任をまったく果たせなかったことは、神の前で、そして多大な被害を与えたアジアの人たちに対して、さらにいっしょに過ちに陥った同国人たちに対して、責任があるのだという、非常に積極的な信仰の告白であるわけです。

依田牧師が横浜に移られた後の歩みをふり返ってみると、神奈川教区での長い、激しい闘いから、つい最近、最高裁でひとつの決着を迎えた「バンザイ訴訟」に至るまで、戦責告白に言い表されている信仰の告白に、心血を注いで来られました。つい最近も、沖縄教区議長である山里勝一牧師が、農村伝道神学校の卒業式の説教で、沖縄がどのような苦しみを負わされ、教会がどのようにその苦しみを共に担おうとして苦しんでいるかということを訴えられました。そして日本キリスト教団がそれに対していかに鈍感であるかということも厳しく問われました。依田牧師も私もいっしょにそれを聞きましたが、依田牧師は、そのすぐ後の週報に、山里議長の訴えに対する深い共感の言葉を書き残されております。

依田牧師の生涯は、いわばこの「戦責告白」に言い表されている信仰告白を全身全霊で担って来られたものだったと思います。「師の衣鉢を継ぐ」とは古めかしい言葉ですけれども、本当に依田牧師は、鈴木正久牧師がああ戦責告白を通して言おうとされたこと、告白しようとしたことをご自分の全身で受け止め、最後まで歩み通されたという思いを、改めて深くさせられているわけであります。

私はいくらか羨望をこめて申しますけれども、依田さんは本当に鈴木正久の秘蔵っ子であったと思います。鈴木正久からティーンエージに洗礼を受け、西方町教会で神学生としての訓練を受けて、全身「鈴木漬け」と言ってもいい、本当に鈴木牧師の秘蔵っ子でありました。ですから本当にこの人こそ、鈴木正久の衣鉢を継ぐにふさわしい人であったのだらうと思います。

言うべきことを言う

けれどもそれだけではありませんでした。もう一つ、語弊を恐れずに言えば、私はある意味で痛快だったと思っていますことがあります。

それは戦責告白が出た翌年の1968年に第15回教団総会が開かれ、依田牧師も教団総会議員に選ばれてこれに出席しておられますが、こともあろうに鈴木正久議長がこの総会に、1

970年に大阪で開かれる万国博覧会にキリスト教館を出展しようという議案を出されたのです。これは、私ども鈴木門下にとっては痛恨の極みであります。戦責告白によって、教会は歴史に対して責任を負っているのだという告白を出した、その翌年の万博出展提案であります。

70年万博というのは、1950年代の朝鮮戦争、1960年代のベトナム戦争によって巨大な富を得た日本資本が、大々的にこれからアジア諸国に対して、今度は経済的な侵略を始めようとする打ち上げ花火のようなお祭りでした。これは、今ふり返ってまさにそうだとおぼざるを得ないのですが、それに何でキリスト教が乗らなければいけないのか。何でまた教団が乗らなければいけないのか……という問題提起が、その後噴出したわけであります。

鈴木議長は当時、これは教会が全力で取り組むような課題ではない。言わば「片手のわざ」だから、やってもいいじゃないか……というようなとらえ方であったと、私は記憶しています。

依田駿作議員は、鈴木議長の問題認識の誤りを感じとって、この議案が出た時に一人反対意見を述べたのです。そしてそのことが議場の空気をひっくり返して、当然シャンシャンと通るはずであったこの議案が否決されてしまったのです。「恩師」であろうが、間違っていると思ったら違うと言う……。これが「鈴木流」であります。私が「痛快」と感じるのは、「師」が間違った時に、「弟子」が鈴木流を発揮したことなのです。依田さんだからできたと思えます。

そのまま否決されればよかったのですが、さまざまな政治的事情が背景にあって、大急ぎで議案を作り変え、一事不再議の原則に違反するすれすれのかたちでこれを可決し、教団は万博出展に協力することになってしまったのです。

そのことが大きな禍根を残し、その後「万博—東神大問題」として、大きな問題になって行くのです。1969年には、全国各地の教区総会が、若い人たちの問題提起にぶつかって教区総会が開けない状況になって行き、教団総会も開けない状況になっていくわけです。そして1970年には、東神大の機動隊導入で、3分の2の神学生が学園から追われ、伝道者になる道を断たれるという事態に発展して行ったのです。

そういう経過のなかで、一つ光っていると思うのは、第15回教団総会で依田駿作議員がこの議案に反対し、一旦は否決されたということです。これは貴重な歴史的事実であると思えます。依田さんという人は、大事なときに、本当に大事なことをスパッと言える人であった。今ふり返って改めてそう思います。

遺産

もう一つだけ皆さんとシェアしたいと思います。それは、依田牧師が私たちに残して下さった非常に大切な遺産についてであります。今日、依田牧師をお送りするに当たって、その大切な遺産をしっかりと受け継ぎたい。そういうことでこの話をさせていただきます。そしてこれは、神奈川教区の諸教会にとって、また神奈川教区にとってだけではなく、日本キリスト教団にとって、あるいは日本のキリスト教会にとっても、非常に大切な遺産であると思えます。

それは何かと言いますと、「神奈川教区形成基本方針」という一つの文書であります。これは1971年の教区総会で採択されております。実は、私はこの1971年に、依田さんに引っ張られて横浜磯子教会に赴任しました。そして、初めて出席した教区総会で、これが可決されたのです。最初、私は大変穏やかな北海教区から来ましたから、何だかよく分かりませんでした。「なんでこんな当たり前のようなことを、わざわざ言わなければならないのか」と感じたのですが、だんだんその中身を理解するにつれ、ここに語られているのはすごく大切なことなのだということを理解するようになりました。

これを作り上げる過程で、依田牧師は本当に激しい闘いを闘われた。先程申し上げたように、万博出展決議から東神大機動隊導入に至る経過は、教会にとってあってはならないことであった……。それを指摘する若い人たちの非常に激しい問題提起が一方にありました。他方に、それを聞きたくないという人たちがいて、聞きたくない人に聞かせようとするから、どうしてもヤジ怒号になっていく。そうすると、それにアレルギーを起こした人たちの中から「機動隊を呼んでこいつらをつまみ出せ」という発言さえ出てくる。本当に険しい空気でした。

依田牧師は、問題を提起する大勢の人たちの声をバックにしながらか、教区総会でも常置委員会でも、議席的にはまったく少数者であった、圧倒的に不利な状況の中で本当に激しく闘われ、かろうじて、少数意見を切り捨てることはしない……という行き方を教区に認めさせました。その結果として、この「神奈川教区形成基本方針」が総会で採択されるに至ったわけです。ですから私は、これを「ヨダイズムの結晶」と呼んでいいのではないかと思うわけでありませぬ。

その内容は、要するに、今日、教区の中に、信仰告白とは何か、宣教とは何かという福音理解の根本的な問題をめぐって、非常に深い意見の相違と対立があるということを認める。当たり前のことです。あるのだから「ある」と認める。「あってはいけない」という考え方はしない。「ある」という事実をまず認めようということなのです。

そして、同時にそういう違いや対立を抱えつつも、主によって建てられた「一つの教会」を造ることを目指そう。教区は形成途上であって、これからいっしょに造っていくことを目指そうという確認です。

そのためには、提起されている問題を棚上げにしたり、あるいは「あなたたちとはいっしょにやらない、少数意見は出ていけ」というふうに性急に切り捨てたりしない。そうでなく、忍耐強く話し合っ行ってこうという確認です。「違い」がある。けれどもその違いを超えて一つになるという努力を続けよう。そのためには相手を切り捨てないで、あるいは問題を棚上げしないで、誠実に話し合いを忍耐強くやろう。これがいわゆる「対話路線」であります。

そして、71年に神奈川教区はこれを採択して、曲がりなりにも、ぎくしゃくしながらも歩み始めました。さらに神奈川教区からこれが教団に持ち込まれて、教団の対話路線が作られて行きました。以後30年近くの間、日本キリスト教団も、もちろん神奈川教区も、この路線の上で何とか一つの教会を造っていこうという努力を重ねてきたのであります。

教会の話としてはこういう経過なのですがけれども、もう少しこれを広げて平たく言えば、

「あなたと私との間には根本的な違いや対立があることを、ごまかさないうで認め合おう。で

も 忍耐強く話し合い、お互いの理解を深めながら一緒にやっぺいこう」。

こういうことなのです。当たり前でしょう？ 本当に当たりの当たり前です。

けれども、この当たりのことが、教区、教団の合意となるために、どれほどの闘いがあったことでしょうか。依田牧師は初めからこの闘いの渦中にありました。というよりも、先頭にありました。あの教区総会の「決議」なる難しい文言に、依田牧師が直接どれだけ関わられたか詳らかではありませんが、少なくとも今申した中身の点では、これを教区に認めさせるというところまでの闘いは、本当に厳しいものだったと察せられるのであります。

今でこそ、多文化共生とか、違いを大切にするということが、ほとんど常識になるほど広く認められておりますけれども、今から35年前の神奈川教区の決議の中に、すでにこれがあるのです。読んでいけばまさに多文化共生で、違いを大切にしようという、これからの社会の流れになっていくべき事柄が、教会の一つの大事な申し合わせとして、すでにここに取り決められているわけでありませう。私は、実は昨夜からこのことをずっと考えて、改めて「ヨダイズム」はすごいと、うならされている次第です。

しかしながら、この時代は非常に暗い方向に舵を切っております。既にブッシュイズムによる武力支配が世界に及ぼうとしています。日本は、「コイズミズム」というようなものがあるかどうか分かりませんが、アメリカと一体になって、世界に対する武力侵略を進めようとしている時代です。そして教団の中にも、問答無用の多数決主義が、だんだん力を持つようになってきています。神奈川教区でも、私などが心配するところは、この教区形成基本方針が、ちょうど憲法9条と同じような運命に置かれ、中身が空洞化されていくのではないかという恐れを、今強く持っているわけだ。

ですから、考えれば考えるほど、この時期に依田さんを失うということは大きな痛手でありませう。本当に痛い。神様は何をしていらっしやるのだろうか。そういう思いを禁じ得ないのであります。

依田さんの背中

私が依田先生との最後の会話になった会話を交わしたのは、20日ほど前に開かれた神奈川教区総会の席でありませう。ふだん、私たちは同じ席に座りませう。依田さんも私も一匹狼ですから、互いにあっちの席とこっちの席にいて、そのときの場面に応じて言うべきことを勝手に言うというやり方をしてきました。ところが、どういふわけか、この間は私の方がいつもと違って依田先生の席のほうに行き、先生の隣に座ってしまったのです。なぜか分かりませう。

隣に座っていますから、休憩時間などにちょっとした会話を交わしました。そして依田先生がぼろっと、

「私も、もう年ですからね。」

とおっしゃったのです。私はそれに対して、

「そんなことを言わないでください。僕たちは依田さんの背中を見て走っているのです。依田さんが前にいて、背中が見えるから安心して走れるのです。今、年取ってもらっては困り

ます。もうしばらく頑張ってもらわなくては……。」
と申し上げましたら、私の目には嬉しそうににっこり笑って、
「そうですかね。」

と言ってくださったのです。私はその時、これは当分大丈夫と思いました。

依田牧師の背中を見ながら走るということは、本当に安心でした。なぜならこの人の言うことには嘘がないからです。ナタナエルがイエス様のところに連れてこられた時、イエス様がナタナエルを見て「この人こそ本当のイスラエル人だ。この人にはいつわりがない」とおっしゃいましたが、本当に、「この人にはいつわりがない」です。言うこと、やることに策略も陰謀もない。ウラも駆け引きもない。本当にストレートです。だから、安心してその背中を見て走ることができたのです。もちろん随分けんかもしました。失礼なことを申しまして、「人が真剣に苦しんでやっていることを、あなたはからかうのか」と叱られたことがあります。今もって私が「あれは申し訳なかった」と思っていることもあるのですが、それでもこの人の背中を見ながら走るということは安心でした。いつわりがないからです。意見が違ってもしも不安がなかったのです。

それから二週間そこそこの時に、突然何の予告もなしに、依田さんは私たちの目の前から消えてしまわれました。「もうちょっと背中を見せてください」と、この間言ったばかりなのに、まるで「これがその返事だよ」と言われるように、依田先生はその背中を私たちの目の前から消してしまわれました。それで気が付いたら、私たちの手の中にバトンがありました。「いつまでも人の背中に頼るんじゃない。今度は君たちがこのバトンを運ぶのだ」と言われているのだと、今ひしひしと身を感じているところであります。

いたわり

もう一つ、依田先生と本当に最後の最後の会話になったのは、同じ教区総会の途中でした。先生は中座されたのです。

「悪いけれどね、中座させてもらおう。」

教区総会の途中で中座するなど、私は今まで依田先生について見たことがありません。けれどもその時は、隣にいた私におっしゃったのです。

「いや、実は康子が風邪を引いて休んでいるので、早く帰ってやらなくてはならない。それで失礼します」。

私は、康子先生には今、お許しをいただきたいのですが、その時依田先生に申し上げたのです。

「ちょっと待ってください。これから常置委員の選挙です。一票が大事な選挙です。それが終わるまで、もうちょっといてください。」

すると、先生はもじもじなさっていて、「そうですかね」と、もう一度座られたのです。

その常置委員の選挙で、予備投票が終わりました。予備投票というのは、それによって候補者の数を絞り、それから本投票をするのです。だから予備投票では、それほど一票が響くとい

うことではない。ところが、あの切れ者の依田先生が、予備投票が終わったら、

「それじゃ、これで私は失礼します。」

と立ってしまわれたのです。私はその時、喉元まで言葉が出かかったのです。

「いや、もうちょっと待ってください。もう三〇分もすれば、予備投票の結果が出て本投票になります。本投票を済ませて帰ってください。」

けれども私は、その言葉を呑み込んでしまいました。

「お大事になさってください。」

としか言えなかったのです。それは、康子夫人のことを心配される依田先生のお気持ちが痛いほど分かったからです。「もういいじゃないか。こんなに康子牧師のことを気遣われる依田先生を、黙ってそのまま帰してあげたほうがいい」。そういう思いの方が強かったからです。それが依田先生と私との最後の会話です。

私は、依田牧師ご夫妻を、おしどり夫婦というふうには拝見してきましたけれども、助け合いながらお二人で走ってこられた、康子夫人に対する駿作牧師の心遣いを、そこで見せていただいたと思います。

しかし、駿作牧師は、康子牧師よりも、そしてわたしたちみんなよりも、一足先に走るべき行程を走り抜いてみ許に旅立たれました。本当に闘いの生涯でありました。テントが畳まれるように、依田牧師はその闘いの生涯を閉じて、神の永遠の家に向かわれたのです。「……戦いを立派に戦いぬき、決められた道を走りとおし、信仰を守りぬきました。今や義の栄冠を受けるばかりです。正しい審判者である主が、かの日にそれを私に授けてくださるのです。」まるでマラソンランナーが、全コースを完走してゴールインすると、公平で本当に優しい審判である神様は、すべてのランナーに向かって「よく走ったね。さあ、この冠を受けなさい」と言ってくださる。依田先生は、そのようにして今、神様のもとにいらっしゃると思います。

私たちの手にバトンが残されました。私自身にあと何年残されているか分かりません。けれども、もしかしたら、私の背中を見ながら、それに励まされて走ってくださる方がいらっしゃるかもしれない。もう私の前にはほとんどいません。依田先生がいなくなると、もう背中の見える人がいません。けれども私は、依田牧師から渡されたバトンを担って、自分に与えられた残りのマラソンコースを完走したい。神様から「よく走ったね」と言っていただけることを目指してこれからも走りたい。そういう決意をここで新たにさせられているわけであります。

お祈りをして終わらせていただきます。

<祈り>

恵み深い神よ。あなたの恵みのうちに、本当に激しい闘いの生涯を、めげず臆せず真っすぐに走りぬいた一人の先輩を、今、私たちはみ許に送ろうとしております。その人柄や、その走って来られた道のりを思えば思うほど、本当に素晴らしい人を、あなたは私たちに与えてくださった、その感謝の思いを深くいたします。もっともっと一緒にいたかった。その思いは尽きませんけれども、私たちはあなたのみ旨をみ旨として受け止め、依田駿作牧師が、私たちに手

渡された、このバトンをしっかりと担って、与えられた道のりを走りとおしたいと願います。

神様、どうか私たち一人ひとりを、あなたが守り、その力を与えてくださいますように。

とりわけ、私たちよりはるかにまさって深い悲しみと喪失感の中にある康子牧師やご家族の上に、どうぞあなたの憐れみと支えをお与えくださいますように。どうかあなたに支えられてこの悲しみを乗り越え、依田牧師が残されたものをみんなで受け継いで、前に向かって進むことができますように導いてください。み前にある一人ひとりをあなたが顧みてくださいますように。

イエス・キリストのみ名によってお祈りいたします。アーメン。